

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(23) 平成13年5月15日

農政・救荒シリーズ

## 高野長英の救荒書『二物考』(Q616-1)

天保8(1837)年のアメリカ船モリソン号を異国船打払令により打ち払うという幕府の決定に、高野長英は『戊戌夢物語』で、みだりに打払令を施行する危険性を説き、このために蛮社の獄で幕政批判の罪で永牢の判決を受けました。彼は嘉永3年(1845)放火に乗じて脱獄するも、嘉永3(1850)年に隠れ家を捕吏に襲われ自害しました。

その長英は文化元(1804)年に仙台藩伊達家家臣後藤実慶の3男に生まれますが、9才で父をなくし母方の叔父オランダ医学者高野玄斎の養子となり、文政8(1825)年にシーボルトの鳴滝塾に入門し、逸材として知られました。天保元(1830)年に江戸に住み、大観堂を開き診療・訳述などで生計を立てていましたが、生活は苦しく、そんな時に三河国田原藩家老渡辺華山と知り合い、華山のために蘭書の翻訳を行い、生活資金を得ます。これをきっかけにし、長英は華山のまわりに集まる開明的な知識人との親交を深めます。

天保4(1833)年から始まる天保の大飢饉の際、紀州藩遠藤勝助が尚齒会と称する会合を設け、開明的知識人を集め飢饉対策を講じました。尚齒とは年齢を尊ぶという意味で、この会は飢饉をしのぎ長生きを目的とするものです。長英もこの会に参加し、飢饉対策として『二物考』と『避疫要法』を記しました。このような開明的知識人の救荒書はそれまでの封建的な救荒書と趣旨を大きく異にしており、飢饉時に蔵を開き、米麦などを民衆に施し、また義捐金により救済したり、米価制限をするなどの従前の飢饉対策を一時的なものに過ぎないと批判しました。彼は気候不順でもよく成熟し、痩せ地でも栽培でき、少ない労働力で収穫できる早熟そば・馬鈴薯のような代用食となる作物の栽培を奨励しました。「二物」とはこの早熟そば・馬鈴薯という2大救荒食物を指し、『二物考』はその種類・効用・栽培法・調理法をオランダ書物を参考にし、易しく簡潔に説いた救荒書です。フランス人ノエル・ショメル『一般家政・博物・道德・技術百科事典』の蘭訳第二版を最大限に利用しています。これは幕府天文方の洋書翻訳事業の一環として『厚生新編』として翻訳されていますが、内部資料であり、長英は直接原書にあたったと言われています。当館では『二物考』(Q616-1)天保七年版を所蔵しています。なお、この書には華山による馬鈴薯略図も掲載されています。

参考文献

『Noel Chomel “Huishoudelijk woorden boek”』(G035/10)

『日本農書全集 70』(610.8/11/)

『高野長英全集』(081.5/夕1)

『日本思想大系 55』(121.08/100)

『日本の名著 25』(081/100)

『厚生新編雑集』(035/2-2)

『駿府城下における薬史学的研究』(S020/26)

華山による馬鈴薯略図